

新約聖書 マルコによる福音書 4章 26節—34節 (新共同訳)

²⁶ また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、²⁷ 夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。²⁸ 土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。²⁹ 実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

³⁰ 更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。³¹ それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、³² 蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

³³ イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。³⁴ たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「種を蒔き」

第二次世界大戦中に亡くなった、ドイツのルター派の牧師に、ディートリヒ・ボンヘッファーという人がいます。祈りについて、ボンヘッファーはこう述べています。

「……祈りは真に懇願でもある。子供は、自分の知っている父に願いごとをする。普遍的な崇敬ではなくて懇願こそ、キリスト教的な祈りの本質である。人間が手を差し出して、父のような心を持ち給うということを知っているお方向かって願いごとを捧げることこそ、神の前における人間の態度にふさわしいのである」。(ボンヘッファー著、森野善右衛門訳、『共に生きる生活 改訳新版』新教出版社、2004年より)

さて、本日の福音書のイエスの二つのたとえ話は、「神の国」についてです。最初のたとえは、「神の国は次のようなものである」という言葉で始まり、次のたとえは「神の国を何にたとえようか」という言葉で始まります。そして、どちらもそのあとに「土に種を蒔く話」に繋がっていきます。

このイエスの二つのたとえ話は、神の国の成長が、人の目には隠されていることを示しています。すなわち、神の国は、人の力ではなく神自身が進展させるものであり、したがって、人の目には絶望と見える時にも、なお望みがあることを示しているのです。

最初のたとえでは、蒔かれた種は、人が夜昼、寝起きしているうちに「ひとりでに」成長し、やがて「豊かな実」ができるが、人間には「どうしてそうなるか」分からない、ということが語られています。

これは、人間の努力が不要だといっているわけではありません。農夫は種を蒔くだけでなく、肥料をやり、雑草を取って、たえず世話をしなければなりません。しかしここでは、そのような人間の努力よりも、自ずと発展する「神の国」の力が強調されています。神の働きがいかに大きく、また人間にとって恵みあ

ふれるものであるかが示されています。

もっとも、人間は種を蒔かなければなりません。しかし神の国を成長させるのは、神です。

この地上において奇跡は静かに、人間の手から離れたところで起きる。これが、人間が受け入れ、応え、ただ信じるしかない、神の国の「秘儀」なのです。

種がひとりでに実を結ぶのは、種の内なる力から来ています。そこには命の神秘があります。それは、一粒の小さな種それ自体に備わっている神の力です。さらに、それを受け止めて、育み生かす大地の生命力があります。私たちは命の神秘に驚きます。神の尊厳の一端にそこで触れるからです。

「まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる」。いっぺんに種が実になるのではありません。豊かな実がみのるには、時間が必要です。成長の期間は、しばしば、あまりに長すぎて、なかなか実がみのらないように見えるかもしれません。ですから忍耐も必要です。

「実が熟すと、早速、鎌を入れる」。この「実が熟すと」を直訳すると、「時が許すと」になります。「時が許すと、早速、鎌を入れる」ということです。実りを人の手でコントロールするのではなく、自然の恩恵として収穫の時期が来る、すなわち「時が許す」という感覚を農夫は持っていたのでしょう。

次のイエスのたとえ話も「神の国」がテーマです。からし種のような小さな種から、空の鳥が巣を作るほどに大きな木が育つ。そして神の国も、そのはじめはどんなにささやかで小さくても、やがてこの世界に、巨大な事実として現れ出る、というのです。

神の国の出発点は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」というイエスの御言葉によって始まりました。それは小さな始まりでした。しかしそこに神の力が働き続け、やがて圧倒的な姿で現れてくるのです。

イエスは、「種を蒔くこと」をたとえ話の中でよく語りました。マルコ 4 章 14 節にも、「種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである」というイエスの言葉が記されています。

「神の言葉を蒔く」とは何でしょうか。エフェソの信徒への手紙 4 章 29 節にはこうあります。「聞く人たちに恵みが与えられるように、その人を高めるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい」（聖書の日本語訳は『共に生きる生活 改訳新版』新共出版社、2004 年、113 ページから引用）。

「神の言葉を蒔く」とは、聞く人たちに恵みが与えられる言葉、その人を高めるのに役立つ言葉を、周囲の人々に、そしてこの世界に蒔いていくということではないでしょうか。

本日の福音書は、「神の国」がテーマです。「神の国」とは、どこにあるのでしょうか。

「神の国」は、種を土に蒔いてそこから育ったように、この地上にあり、そし

て天にあるのだと思います。

『ジャックと豆の木』という物語の中で、ジャックが植えた豆の木が天まで伸びたように、神の国は、天と地をまたがって、天上とこの地上を繋いでいるのではないのでしょうか。

そして人間が活着ている中で、その各々の人の中においても、神の国は、種から芽が出て育ち大きくなっていくように、発展・成長していくものなのだと思います。

人生を歩んでいる中で、歳月の流れと共に、「まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる」ように、自分自身の中で神の国が成長・発展して、大きな存在となっていくところを想像してみてください。

年齢を重ねると共に、肉体は弱ったり衰えていくかもしれませんが。しかしその一方で、自己の内側において、神の国は成長・発展し、豊かな実をつけていくのです。

晩年に近づいてきた人は、その人のそれまでの生き方、心の在り方によって、ジャックの豆の木が、地上に根を張りながらも天まで到達したように、天の叡智をこの地上に降ろすことができるのです。

「主よ、わたしはあなたに叫びます。朝ごとに祈りは御前に向かいます」（詩篇 88:14）と詩編にあるように、一日の最初の思いと最初の言葉は、神のものであると聖書に記されています。

朝、目覚めたあとというのは、霊的な示唆やインスピレーションを受ける時です。

今回、説教準備をするにあたり福音書の「蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり」の、「野菜」という箇所が私の中に印象深く残っていたようです。

朝、目覚めたあと、私の心に、私が目に見えない天の存在に見守られながら、鎌を使ってセッセと野菜を収穫している映像が浮かびました。その野菜は、大きな白菜やキャベツという感じでした。

そしてその収穫した野菜を、自分のものにするのではなく、他の人々に分け与えていました。

そのイメージから「実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである」という言葉に表される、「豊かに実った神の国」とは、このようなものではないかと感じました。

そこで採れた神の恵みの収穫物を、自分のものにするのではなく、自分自身はそれを流通させる通路のようになって、周りの人々に届けるのです。

「とりなしの祈り」とは、他者のために祈ることです。

他者のために、本気で神に頼み、請い続ける祈りです。

人が他者の代わりに行う「とりなしの祈り」には、大きな力があります。

私たちも、日々、祈りつつ、この地上に生きる喜びと、天に生きる喜びを、共に分かち合いましょう。

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 エゼキエル書 17章 22節—24節（新共同訳）

²² 主なる神はこう言われる。わたしは高いレバノン杉の梢を切り取って植え、その柔らかい若枝を折って、高くそびえる山の上に移し植える。²³ イスラエルの高い山にそれを移し植えると、それは枝を伸ばし実をつけ、うっそうとしたレバノン杉となり、あらゆる鳥がそのもとに宿り、翼のあるものはすべてその枝の陰に住むようになる。²⁴ そのとき、野のすべての木々は、主であるわたしが、高い木を低くし、低い木を高くし、また生き生きとした木を枯らし、枯れた木を茂らせることを知るようになる。」主であるわたしがこれを語り、実行する。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 5章 6節—17節（新共同訳）

⁶ それで、わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしていたかぎり、主から離れていることも知っています。⁷ 目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。⁸ わたしたちは、心強い。そして、体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます。⁹ だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。¹⁰ なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。

¹¹ 主に対する畏れを知っているわたしたちは、人々の説得に努めます。わたしたちは、神にはありのままに知られています。わたしは、あなたがたの良心にもありのままに知られたいと思います。¹² わたしたちは、あなたがたにもう一度自己推薦をしようというのではありません。ただ、内面ではなく、外面を誇っている人々に応じられるように、わたしたちのことを誇る機会をあなたがたに提供しているのです。¹³ わたしたちが正気でないとするなら、それは神のためであったし、正気であるなら、それはあなたがたのためです。¹⁴ なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだこととなります。¹⁵ その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きていた人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。

¹⁶ それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知るうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知るうとはしません。¹⁷ だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

教会讃美歌 172番「つくりぬしを」1,2,5節、238番「いのちのかて」1,2節、286番「主のみことばを」1,2,6節、260番「主イエス・キリストよ」1,2,4節、199番「主よいま去りゆく」1,2,3節。